

# 備陽史探訪

第94号  
発行  
備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL. (0849) 53-6157

## 草戸山周辺

会長 田口 義之

「沼隈郡草戸山は、朝日にむかひて花の紐をとぎ、夕日をおひて、もみち葉ちしほのきぬをならへ、巖巖々として諸木枝をならへ…」

江戸時代初期の俳人、野々口立圃（りゅうほ）の「草戸記」（西備名区）所収の一節である。

福山市街地の西に位置する草戸町、なかでも芦田川を渡った草戸山一帯は、今日でもかつての面影をよく残した地域である。山麓の明王院から東を眺めると、立圃の「麓をめぐる川音は嶺の松にことをとふ」ほどではないにせよ、現在でも瀬戸川が山麓をめぐる、その向こうには備後の「母なる川」芦田川がゆったりとした流れを見せている。

草戸の歴史は、今も昔も、明王院を抜きにしては語れない。町名自体、明王院の前身常福寺の門前町「草戸千軒」に由来するものであるし、今日周辺が市街地に接しながら

も豊かな自然を残しているのは「国宝の寺」明王院があつたればこそである。

立圃の「草戸記」に「大同年中の艸創と言ひ伝へたり」とあるように、明王院の前身常福寺の歴史は平安時代初期にさかのぼる。その開基は弘法大師空海と伝え、寺伝を裏付けるかのように、昭和三十七年の解体修理に際して、現在の本堂下に創建時の「掘り立て柱建物跡」が発見されている。

市民に親しまれてきた本堂と五重塔（共に国宝）が建立されたのは、明王院がまだ常福寺と呼ばれていた時代のことである。昭和三十四年から実施された解体修理の結果によると、本堂は鎌倉時代末期の元応三年（一一三二）に、五重塔はその二十七年後の貞和四年（一一三四）にそれぞれ建立されたことが判明した。常福寺が寺観を整えて行った鎌倉時代末期から南北朝時代にかけては、門前の芦田川の河原に「草戸千軒」が繁栄していた時代である。常福寺

の隆盛とこの草戸千軒町の繁栄は密接なつながりをもっていたのに違いない。室町時代末期、草戸千軒町が衰退に向かうと、常福寺も衰えていった。

この常福寺が現在見るように復興されたのは元和五年（一六一九）、水野氏が備後十萬石の大名として入って来て以後のことである。同氏は伝統ある堂塔の荒廃を嘆き、その復興には援助を惜しまなかった。そして、堂舎の修理を進めると共に、その維持にも心を砕き、本庄の青木ケ端にあつた明王院と常福寺を合併することで、この由緒ある建物を後世に伝えようとした。現在の明王院の起りである。

京都や奈良の有名寺院とは違い、普段の明王院は静かである。山門から境内に足を踏み入れると、正面に本堂、左手に五重塔が空に聳えている。柱の朱色が背後の山の緑に映えて美しい。右手には江戸時代初期の建立と伝える庫裏（くり）が落ち着いたたずまいを見せている。

左奥に草戸山への登道が口を開けている。樹林に覆われた、昼なお暗い登山道を上って行くと一〇分くらいで頂上につく。正面の神社は愛宕さんで、寛永五年（一六二八）の創建と伝え、市の重要文化財に指定さ

れている。ここから右手に道をとると親王院の旧跡が落ち葉に埋もれている。親王院は、空海の弟子で、羅越国（現在のベトナム？）で虎に食われたという高岳親王が一時滞在したところと伝わっている。

この道の突き当たりが南北朝時代、南朝方として活躍したという佐波越中守可美の佐波城の跡である。遺構は浄水場の建設によってほとんど失われているが、現在でも背後を掘切った空壕のあとがかすかに残り、ありし日をしのばせてくれる。

明王院の北隣が、正月の初詣で賑わう草戸稻荷神社である。室町時代以来の古社で、元は芦田川の中洲（草戸千軒遺跡）にあつたが、江戸時代初期の洪水で、現在の場所に移建されたという。

正面に懸かった太鼓橋の上に立つと、かつて草戸千軒町が繁栄した河原が眼前に広がっている。発掘調査も終わり、削り取られて粋のみとなった中洲を見ると、人間の営みのはかなさ、空しさが実感として迫ってくる。



二〇〇〇年二月、

## 山南さんなの探訪

小島袈裟春

国道二号線、福山市西神島町の辺りから、瀬戸川を渡って高浦、瀬戸池、六本堂、山南へと続く道は、私にとつて思い出深いというか、苦楽が交々と混ざりあつた道なのであつた。

三十年近い昔、現在の「弥勒の里」の辺りに、常石造船の社長が各地から由緒のある建物を何棟か移築してあつたが、その中の一棟が、我が社で借り受けた「社員研修所」なのであつた。冬は冷たく夏暑く、朝五時半の体操と二時間の座禅から始まつて、夜は十一時過ぎまで。業務研鑽、自己研鑽、徹底討論、宿題と二日か三日。ある時は一週間以上と、専用バスに揺すられて何回も何回も通つた道。また福山に来て覚えた釣り道楽、夜釣り昼釣りと期待に胸を弾ませて通つた道でもある。

この道の周辺に古代から中世近世へと続く遺跡、史跡が存在していることを知つたのは地域史学者、村上正名先生の警咳に接した事と、その御著書によつてであつた。

そして自分なりに史跡の探索を始めたのであつたが、何分にも土地不

案内では自ら限界のあるのはやむを得ない事でもあつた。

さて今回は、備陽史探訪の会の「山南の歴史探訪」、田口会長自らがご案内に私の期待は高まるばかりであつた。

▽山南小学校裏庭の石棺（身部分のみ）――

以前は何鹿（いかづか）の旧桑田氏邸の庭にあつたのだそうだ。「福山市史」にも写真と共に記載され、備南では数少ない例との解説もあるが、古代の花崗岩製としては細工が細かく、全体が小ぶりで華奢に見えるところから、後世の作品との異論も多いのだそうだ。なお山南の周辺地域の松永湾岸一帯、福山市瀬戸町、津之郷町、田尻町、鞆の浦と沼隈半島の周辺は古墳の群集が見られるのに、半島の中心地域には極端に少ない。かつて江戸時代、中山南の辺りに雄塚、雌塚、北迫塚の三基があつたが、明治期までに全部破壊され今は痕跡を残すのみ、と福山市史にある。もちろん石棺がそれらから出土したのかどうかには、何の伝承も無い。

▽天神山、延広神社――

山南小から県道を隔てた北西の小高い丘が天神山で、頂上には延広神社（祭神は応神、仁徳両天皇、神功皇后）と天神社が鎮まる。「備陽六郡

志」によれば信広八幡社とある。現社殿の前の看板によれば、天文八年（一五三九年）時の実力者、桑田信房が丸山城を築くのに伴つて、他所にあつた八幡社をこの地に移し、自分の一字を入れて信広社と称したという。慶長十九年（一六一四年）の火災で全焼。元和二年（一六一六年）に再建したのが現在の社殿との事。拝観したところ、神殿の前面は

部戸だつたのが珍しく、出入りが不便とよく見たら西側にドアが付いていたのが面白かつた。参道の途中に石造の大きな明神形の鳥居があり、元和二年の年号と奇進の村名、石工名が陰刻してあつて当時の信仰圏が分かる貴重な資料でもある。

ところで冒頭、村上正名先生の警咳に接したと書いた。ほとんどは講演会の拝聴だつたが、ただ一度相對で教えを頂いた事がある。それは先生のご案内で史跡見学の時であつたが、「神社の象徴でもある『鳥居』は何を意味しているのでしょうか」との私の質問に、丁寧に教えて下さり、何か気が付いたように一同を集めて「鳥居」の意味を全員に説明されたのであつた。忘れられない思い出である。

▽丸山城と悟真寺――

天神山の西、小丘を環状に整地し

てあるのが丸山城跡との事。伝承によれば桑田信房が天文時代、丹波から移住して築城というが、ご説明では城の立地と縄張りが、各地に多い鎌倉期の地頭の屋敷地と酷似しているとの指摘であつた。頂上には昭和一四年に桑田氏の御子孫が建立した、大きな自然石の顕彰碑が荆棘に覆われて立っているのがちょっと怪しい。

悟真寺は丸山城の北、地続きに建つ浄土宗の立派な寺院である。南北朝頃から足利氏と姻戚関係にあつたこの地の領主、渋川氏の保護を受けて栄え、天正初年同氏が没落してからは、渋川氏の家臣であつた桑田氏が豪族に成長し、一族の菩提寺としたとの事である。今この寺を訪ねると本堂の西側一帯の斜面は、何鹿（いかづか）の本家を中心に、桑田一族の墓碑が林立し、その隆盛が偲ばれるのであつた。

▽光照寺――

私はずつと以前から拝観したいと思つていた寺である。俗称に「備前法華に安芸門徒」というのがある。備前の国は日蓮宗の信者が、安芸の国は真宗の信者が圧倒的に多い事を指すが、その安芸の真宗布教の原動力を担つたのが、山南の光照寺なのだそうだ。寺伝によれば鎌倉幕府の

創始者、源頼朝の猶子、藤原頼康の四男が出家して、明光と称し、頼朝の援助を受けて鎌倉に「最宝寺」を開き後、備後の山南に来て「光照寺」を興し浄土真宗の布教に努めたところ。しかし近年の研究によればこの寺伝は問題が多く、特に初期には「教義」に関しての矛盾もある、との事であった。

しかしその活動状況は特筆すべきであって、『福山市史』によれば、文化二年（一八〇三年）福山藩内で末寺を持つ寺院、一六カ寺の内一位は、真言宗明王院で四三ヶ寺、二位は真宗光照寺で二四ヶ寺と他を圧倒している。特に光照寺は備後全体では一九二ヶ寺、備中一六ヶ寺、安芸七八ヶ寺、出雲四一ヶ寺、石見四七ヶ寺、長門一七ヶ寺と合計三七一ヶ寺の末寺を持っていたのであった。隆盛を極めた光照寺が一朝にして廃寺同然と変わったのは、明治初年の「廃仏毀釈」であろうと私は考えている。先年、公費によって一応の修理は終わり倒壊は免れたが、現在一軒の檀家も無いのだそうだ。さて光照寺はどうなるのであろうか。

▽何鹿城（いかづかじょう）――  
光照寺から小谷を隔てた南側で、森脇山から北西に張り出した尾根を三重の大堀切で断ち切り、連郭式の

山城に構えた比高七十m、典型的な戦国初期の山城との事である。「備後叢書」等によれば天文の初め、前出しの丸山城主、桑田信房の兄桑田将能が、丹後から移住し、当時の領主箱田氏を追い落として「何鹿城」を構えたところ。が、ご説明ではこれが真実は問題があり、当時の国主、洪川氏から桑田氏への初の給地宛行状が天文十六年（一五四七年）である事から、桑田兄弟が力をもち始めたのもその頃と考えられる。桑田一族はその後、毛利氏の麾下として山南に根を下ろし、近代に至るまでこの地に大きな影響力を維持し続けたのだそうだ。

▽山南の弥生時代の平形銅剣――  
私は、村上正名先生のご著書を読んだ時から興味深々だったのだが、何せ土地不案内で今回まで、永い間お預けであった。御案内を頂いた備陽史探訪の会の会長、田口先生に厚く感謝申し上げる次第である。

出土地は中山南の日枝神社の東、小沢を一〇〇m程入ったところ、夫婦岩（御著書では兜岩）と呼ばれる大岩の下、というのが現在は破壊されて、ちよこんとした岩の前に由緒を記した看板が立ててあった。現物は日枝神社の「神宝」として伝世し厳重に保管されているのだが、今回

は特に某所で拝観の栄に浴し、有り難い事であった。

目にした現物は、完全形で腐食も無く鈍い光を放っていた。大切に扱われて来た事がよく分かる神宝でもあった。

なお「御著書」によれば、これと「同型同范」と思える平形銅剣が福山市熊野町の熊野神社の裏山から出土しているとの事。半島中央部に初期墳墓や古墳の少ない事と考え合わせ、古代の沼隈半島は「祭祀」を行う神聖な地域だったのであろう、と私は思うのである。

▽西光寺の梵鐘――  
浄土真宗の寺院で、同村内の宝光寺の末寺として特別の謂れは無いのだが、幕末にアメリカのペリー来航の、国難に際し所持の梵鐘を供出してしまった。その後、明治の中頃、広島市内で引き取り手のない、この梵鐘を安く買い取ったのであるが、近年に至って、天文一三年（一五四四年）大内義隆が願主となって厳島神社に奉納し、外宮の「廿日市市」の地御前神社に奉納された物と判明。昭和五四年県の重文に指定された。今や同寺の最高の宝物とされている。

## ああ西南の役

後藤 匡史

一、一度、男と生まれたからは武士で死のうぞ薩摩兵子  
紅い血が燃ゆ肥薩の戦地  
ああー薩南健児は行く

二、行く手さえぎる田原の坂は  
チエストー、チエストーの  
雄叫びも  
雨に消されて弾丸の中  
ああー頼みの示現流

三、戦、敗れし足取り重く  
帰る故郷、桜島  
ここを最後と立籠る  
ああー城山に花と散る  
ハチエストー



注：チエストー＝薩摩言葉で、それ行け!!

(二〇〇〇年三月)

## 秋の古墳めぐり

## 備北の古墳をめぐる—東城町・

## 西城町を中心に—を終えて

安原 誉佳

昨年十一月十四日(日)、毎年恒例の秋の古墳めぐりを実施した。今回は県北の比婆郡東城町から西城町にかけての古墳を見学した。前期の前方後円墳あり、初期の横穴式石室もあり、さらに横穴墓ありという古墳の一通りが見ることの出来る贅沢なコースであった。

午前八時前、予定時刻より少し早いが、参加者三九人は全員揃ったため、福山駅裏を出発。一行を乗せたバスは府中方面に向かい、父石では芦田川に沿って北上。

やがて上下町に入ると最初の見学地、南山古墳に到着。この古墳は全長二四mの帆立貝式の前方後円墳。後円部の径が十六mに対し、前方部の長さは八mと短く、また高さも低い。後円部には横穴式石室があり、県道の方を向いて開いている。全長は八・三m、入口は狭いが、羨道は奥に行くほど広く、玄室も同様。ここで私は、石室を見学するのに懐中電燈をバスに忘れるという失敗を侵してしまった。皆さんには大変ご迷

惑をおかけしました。当時峠を歩き来する人たちにはこの古墳ほどのように映ったのだろうか。

見学を終えて出発、庄原では国道一八三号線沿いの発掘調査現場の横を通過。シートが掛かっていたので詳細はわからない。ここは小和田遺跡で、奈良時代とみられる鉄洋や製鉄炉が見つかっている。奈良の平城京跡から出土した木簡に、「備後国三上郡信敷郷から調として鉄が収められた」と記されていたことから、信敷郷にあたるかもと考えられたとのこと(実際はここではなく、もっと南の方)。西城町に入ると、西城町歴史民俗資料館前で休憩。資料館では通常ならこれから見学する八鳥塚谷横穴墓の模型があるのだが、特別展として林業展を行っていたため、展示されていなかった。文化財マップを買ったり、横穴墓の報告書を買ったり、皆さんは熱心に資料を集めておられた。

出発後十五分程で下車、ここから徒歩で十分弱で本日の最大の見所、八鳥塚谷横穴墓に到着した。横穴墓とは丘陵の斜面や断崖に墓室を掘削して設けているもの。西日本では山陰や北九州でみられ、県内では比婆郡に集中している。玄室と羨道があり、横穴式石室と構造がよく似てお

り、規模や出土品などでも似た点が多い。綱本さんの流暢な解説にみんな熱心に聞き入る。丘陵南斜面に六基が直線上に並んでおり、玄室の規模は幅が一・六m×二m、長さは平面が正方形で二m未満、長方形で三mくらい。うち三号墓と五号墓が入りやすかったのが玄室に入って見学。天井がアーチ状のものと尖頭状のものがあり、一部には加工の痕も見られ、砂岩は目が細かく軟らかい事にもみんな驚嘆。このまま崩れてしまえば、まさに追葬になってしまうような雰囲気だ。

東城をめざすが、庄原から西城への川筋をなだらかに上る地形と異なり、こちらは険しい山中を行く。東城町に入り、徳雲寺で昼食をとる。東城町の中心部を経ると下車、山道を二十五分ほど登ると大迫山第一号古墳に到着。実はこの下見をしたのは前日のこと、登り口が判らなかつたので七森さんと来て確認したのだった。標高はおよそ四〇〇mで、比高は一〇〇mと高い所に築かれていますが、残念ながら東城の町並みは周りの樹木で見渡せない。全長四五・五mの前方後円墳で、後円部に対して前方部は低く、また撥形に開く古い要素がみられ、四世紀中頃とみられる。縦穴式石室が一基あ

り、遺物は銅鏡、玉類、武器、農具などが出土している。この地は古くから吉備と出雲の文化が交わることから、吉備勢力の最前線で出雲勢力を、あるいは大和政権による吉備と出雲の両勢力の監視を担う重要な地であったと思われる。

紅葉の始まった帝釈峠を眺めながら神石町に向かう。途中に小口積穴式石室とみられる大塚第一号古墳があったのだが、石室を見られないため通過、車内で説明のみとした。

神石町役場近くの辰ノ口古墳は全長七七mの前方後円墳で、大迫山第一号古墳よりやや新しい四世紀後半の築造で、当時としては県内最大である。長さ六・七mもある縦穴式石室を見ることはできないが、写真を見ると薄い石材を用いて立派なもの、西側から見た墳丘とともに美しい。びっしりの葺石や、古い型式の埴輪が見られるのだが、石室内に副葬品が残されていないことは残念、どのような物が納められていたのだろうか。

これで今日の見学はすべて終了し、予定より少し遅れて午後四時前、帰路につく。国道一八二号線を下って福山駅裏に到着したのは午後六時頃であった。

今年もやります！

# 第一八回「親と子の古墳めぐり」

今年も「親と子の古墳めぐり」の季節がやって来ました。今回で18回を迎えるこの行事も例年のように当会発行の「古墳探訪」に沿って深安郡神辺町から福山市加茂町までのコースと決めました。それから、例年のように昼休憩に行っていたクイズを本年は取りやめます。昨年のクイズで泣いた子の顔と声が未だに傷として残っていて、思い出すたびに痛みを感じるから…。そこで本年は趣向を変えて、あっ！と驚くことをしてみたいと思っています。どんなことか？ウフ、内緒。これを聞くと新聞社やら放送局がわんざと集まるに違いない。楽しみだね、みなさん。以下に今回訪れる古墳の説明と要項を書いておきます。古墳めぐりをしたい方、新聞に載りたい方や、テレビに出たい方もどんでん参加してくださいネ。

【実施要項】  
〔期日〕五月五日(金、こどもの日)  
\* 雨天は五月七日(日)に順延  
〔集合・時刻・場所〕午前八時  
福山駅南口約り人像前

〔参加費〕大人六〇〇円  
子供三〇〇円

\* 保険料、資料代を含む  
\* 交通費は各自負担

### 〔申し込み方法〕

住所、氏名、年齢、参加者の関係、電話番号を明記の上事務局まで往復葉書にて申し込んでください。

〒七二〇一〇八二四

福山市多治米町五一一九一八  
備陽史探訪の会事務局

〔その他〕約三時間の行程を歩きますので、歩きやすい服装と靴を着用してください。

弁当他飲食物は各自持参してください。

### 〔見学場所〕

#### ①大坊古墳

大型の花崗岩切石を使った横穴式石室を持つ古墳時代後期(七世紀初め頃)の古墳。石室は羨道と玄室の間に石柱が立てられ、両者はほぼ同じ大きさで作られている。

#### ②安光古墳群

山の斜面を利用して幅数十mの範囲内に小規模の古墳が築かれている六世紀後半代の古墳群。

\*カンカン石古墳

この古墳群の盟主的古墳で、片袖式の横穴式石室を持つ。

#### ③石鎚山古墳群

芦田川下流域においても最古の古墳の一つ。列石をとまなうことや中国鏡が出土している点でも重要な四世紀代の古墳。

#### ④猪の子第1号古墳

横口式石槨を持つ終末期の古墳。

以上、このコースは古墳時代前期から終末期までのいろんなタイプの古墳を見学できる贅沢なコースです。簡単な内容しか書きませんが詳しい説明は古墳めぐり当日に講師にじっくりと聞いていただければと思います。



## 第四回郷土史講座

## 古代における烽

この題で数年前に話したと思いますが、たぶんほとんど内容は変わらないと思います。あれから、新しく発見されたことは、岡山県の鬼ノ城（しじょう）でのろし跡と考えられるものが見つかったことぐらいと、弥生時代の高地性集落からのろし跡が見つかったというものぐらいで、あたらしく烽に関しての論文はわたしは読んでいません。それでは、どのようなこととお話するか、かいつまんで説明します。

烽とは古代の文献では「とぶひ」と読み、奈良時代以降に法令で定められた制度で、中世でいう「のろし」のことで、味方への通信のために煙などを利用して情報を送るための施設のことです。

本当はわたしは考古学からみた、のろしの跡について話してみたいのですが、いかんせん古代の烽の跡と確定されているものはほとんどありません。まずどのようなものがあるか列記してみます。

最初に烽の前身と考えられるものに弥生時代の高地性集落の一部があげられます。これは見晴らしのいい場所に作られ、食料の自給が難しい

場所のために平地の母村から食料を供給していたと考えられることから、敵などの侵攻があった場合に備えた遺跡と考えられます。また、焼土壙（しじょう）があるものがあり、同じ時期に営まれていた高地性集落の跡をむすんでのろしを利用した通信網と考えられています。

次に、古代山城では鬼ノ城でのろし跡と思われるものが見見されました。

これは、古代山城をのろしで、九州から畿内への通信網の一部と考えられています。現在、この城にか発見されていません。

中国地方では出雲風土記に記載されている烽は場所がほぼ確定されていますが、現在遺構のはっきりしているものはない？というものは、『島根県史』等に記載され、遺構として穴・焼土と書かれています。発掘調査がされず、穴や焼土ではすぐにわからなくなってしまうから、現在の現地での見学の結果では遺構がはっきりしません。だから、わたしもこことは思いますが、どのような遺構であったのかは不明です。他の風土記（肥前・豊後風土記）に記載されている烽については烽の名前も出ておらず、何郡に何ヶ所と記載されているのみです。

唯一、烽の跡がはっきりしているものは栃木県宇都宮市で「烽家」という墨書土器が出土した飛山城跡。しかし、ここも場所は特定できましたが、中世に山城となって遺構が壊されて、「烽家」という文字瓦が出土してわかりました。

石川県鹿島郡鳥屋町の渤海使節団を知らせる瀬戸烽。山中のど真ん中に有り、現在遺構の崩壊が、激しい。

秋田県井川郡昭和町の羽白目烽は圃場整備により発見されたために、遺構は壊されています。ここは焼土が薄く違うという意見もあります。

古代で他に烽とされるものは、豊元（とよもと）氏が発表している九州から畿内への古代山城と烽をつないだ論文で、瀬戸内海などの竜王山・日山・火山等の地名を元にしてその地を烽と考えている説等がありますが、他に飛山等の「とび」という地名がつくもの等の、あくまでも地名などの研究から烽の跡と考えているものしかなく、烽そのものを考古学的に調査されたものはありません。

中世では山城の關係の論文で境目の城が見張り城と考えてのろしをあげていたというものもあります。遺構の確定しているものはほとんどありません。また山梨県には、狼煙台の伝承をもつ小規模城郭が多く、

須玉町でのろしマラソンを実施しているほどです。

日本の烽での遺構は穴が空いて焼土が残っているぐらいしかわかっていません。近世では、江戸時代の藩政の時にのろしを焚いていることはわかっていますが、遺構としては残っていません。これも穴のみであつたためでしょうか。

大阪の米相場を知らせるための旗振りという通信手段も知られていますが、遺構としては残っていません。また、尾道の青年会議所が、一九八八年に大阪から尾道への米相場を知らせる旗振りを実際にしてみました。があります。

それでは、朝鮮半島ではどうでしょう。ここには、近代の電信技術が入るまで烽を使っていたので、近代の烽の遺構が残っています。

(七森記)

## 【実施要項】

〈講師〉 七森義人さん

(古墳研究会評議員)

〈開催日〉 四月二二日(土)

〈時間〉 午後二時～午後四時

〈会場〉 福山市中央公民館会議室

〈会費〉 資料代として、一〇〇円

程度必要

## 「初詣は稲荷」の話

門田 幸男

かつて正月は大年(稔)神、すなわち「稔りの神」が訪れる(または招く)と考えられていた。現在は、神社に行けばいつでも神様がいることになっていて、年が改まると氏神または鎮守の神様に参拝し、家内安全無病息災を祈願するのがふつうである。しかし昔は違った。正月一番にすることはその年の稔りが豊かであることの祈願であった。

記憶に新しい平成の大凶作(青森県の作柄は平年の一割だった)のときは海外から米を輸入することができたので人が飢えて死ぬことはなかった。外国に食糧輸出余力があったこと、わが国がお金持ちになってきたこと、輸送力が強化されていたこと等の要因があったからである。これは重要なことなのでぜひ押さえておきたいのだが、今でも世界には餓死者を出す国が少なからず存在するということがある。日本も近世以前は、餓死者が出ることはそれほど珍しくなかった。近世中期まで貨幣経済がそれほど発達していなかったため、富の蓄積があまりなかった。また金があつてたとしても鎖国に

よつて貿易が禁止されていたので海外から食糧を調達することができなかった。もちろん輸送力も貧弱だった。つまり凶作による飢饉が発生してもそれを救う手だてがほとんどなかったのである。とくに津軽藩など東北諸藩で不作の年に多く餓死者を出したといわれている。

明治になってから食糧の輸入はできるようになったが、国内の食糧事情が劇的に改善したわけではない。日本はやはり貧しかった。太平洋戦争後も基本的に食糧は不足していた。そこで、逆に人間を輸出(移民という)し、それに対応したのである。

日本が豊かになったのはほんのここ三十年ほどで、長い日本の歴史においてはは一瞬に過ぎない。とにかくほとんどの時代を通じて食糧の確保は国、個人を問わず重大関心事だった。そこで、他に手だてのない昔の人は初詣でお稲荷さんに食糧確保をお願いしようということになったのである。さて、だれでも知っているように稲荷と狐は切っても切り離せない関係だが、その真の理由を知っている人はどれほどいるだろうか。

一般に、狐は稲荷の神のお使い(眷属という)だとされている。村上正名氏は平成八年度の福山人人大学講座で、稲荷神のお供えをドロ

ボーに來ていたのがいつのまにか祀られるようになった、と話されていた。しかし、たいへん失礼だが、この話は噴飯ものだ。お供えドロボーをいつたいたれが拜むだろうか。そんなことは絶対にはあり得ない。では、狐が祀られるのは何故だろう。実は、ここにも陰陽五行思想が隠されているのである。

全国のお稲荷さんの総本社、洛南の伏見稲荷大社の創祀は、社伝によると、和銅四年(七一)である。

この年は干支で表すと「辛亥」の年である。陰陽思想では「辛」は「金氣」、「亥」は「水氣」にあたる。陰陽思想には「金生水(金は水を生む)」という原理があつて、偉大な神の靈威の誕生は多雨を招くものと考えられた。翌年の和銅五年は「壬子」の年で、「壬」「子」ともに「水氣」、さらに、翌々年の和銅六年の「癸丑」の年もなんと、「癸」「丑」ともに「水氣」を表し、「水氣」の年が三年続きとなっている。水害が必至と当時の人々は考えたのも無理からぬ。

そこでようやく狐の登場である。狐はその毛並みが黄土色をしている。陰陽五行によると、黄土色(黄色)は「土氣」の色とされており、狐は土氣を象徴する動物なのである。一方、陰陽思想には「土剋水(土は水

に剋つ)」という原理があり、凶作をもたらす長雨による水害を防ぐには、土氣を表す狐が重要視されたのである。これをお稲荷さんにくつつけることで呪術的に水害を防ごうとしたのである。しかも狐が祀られたのは、二月「戊午」の日で、「午」は「火氣」を表し、「火生土(火は土を生む)」原理によつてその威力が倍増するというわけである。

また、多くの方が疑問を感じておられないが、よくよく考えると不思議なことがある。お稲荷さんの朱の鳥居である。鳥居はもともと黒木または白木である。仏教建築ではないのだから本来朱を塗らないものなのである。

ここまで読んで来られた方はなぜ朱を塗るのか、その理由がおわかりのはずだ。つまり、朱の色は火氣の象徴であり、狐ともにお稲荷さんの大きすぎる水氣の靈威を防いでいるのである。三年続きの水氣の年は昔の人々にとってよほど恐ろしかったに違いない。

昔はどうであれ、現在稲荷を祀る祠に置かれている狐はほとんど白狐である。黄土色であれば、「土生金(土は金を生む)」の原理で、堅牢な身体とともに「お金」も持つてきてくれるはずが、なぜか白。実は、白

もそのものずばり「金気」を表している。だから白狐のほうが御利益が多いと考えられたとも思われる。しかし、これは考え過ぎで、単に見た目の美しさを求め、白狐に変わったのかもしれない。

ところで、古代中国では狐に三徳があるとされた(「説文解字」西暦二二一年)。

一つは、その色がよい。  
二つは、その形がよい。

三つは死んだとき頭を出生地に向けるのがよい。というものである。

黄土色(黄色)は宇宙の中央に位置する色(相撲と同じで、青・赤・白・黒の中央に黄土色の土俵がある)とされ、中国では皇帝のみに使用が許された色、いわゆるエンペラーイエローである。

狐の形がよいというのは、前が小さく、後ろが大きいというもの。この条件を満たしているのは他にもあり、それは瓢箪である。「瓢」の「つくり」は「狐」と共通しているがこれは偶然だろうか。瓢箪はそのままでも水・酒の容器として重宝するが、縦に割るとスプーン(柄杓)になる。

天空に輝くスプーン北斗七星は、天帝(宇宙の主宰者、北極星の神霊)に食物を捧げる役目を持つと考えら

れていたもので、瓢箪に形が似ている狐は、この面からも食物すなわち稲荷の神の役目に通じている。  
三番目は、真贋はともかく、ご先祖様や故郷を大切に思う中国の人々の心情をよく表している。

このように稲荷の狐にはれつきとした理由(理屈?)があるのに、お供えドロボーはひどすぎませんか。狐のために弁護した次第です。



坪生町江戸野の荒神社

### 新春青春きつぷ 高砂・明石の旅 石の宝殿で腰抜かし、明石城を味わって、 人丸神社に初詣の巻

小林さなえ

私は今年五月五日で入会して満二歳を迎えます。先輩方の後をついて行くのが精一杯ですが、今後ともどうぞよろしくお願いします。

さて二〇〇〇年一月九日、ミレニアム最初の例会は、二八名の方々とともに石の宝殿と明石の旅から始まりました。日本三奇の一つという、石の宝殿とはいったいどんなものか興味津々で、新春早々この企画を待ち望んでいました。

高砂市阿弥陀町宝殿山、長く急な石段を上がると生石神社があります。実は、石の宝殿はこの神社の御神体なのです。神社はまさに石切りの場の中にありました。この神社周辺の山塊を「竜山」といい、古来、良質な石材を産出することで有名です。昨年の一泊旅行のさい、東播磨に石棺仏が多い理由の一つは竜山石の産地であること、と教わったのを思い出しました。

神社の現在の祭神は大己貴命(大國主命)と少彦名命で、出雲神話では協力して国造りをした神様です。石の宝殿が初めて文献に現れるのは「播磨国風土記」ですが、その記

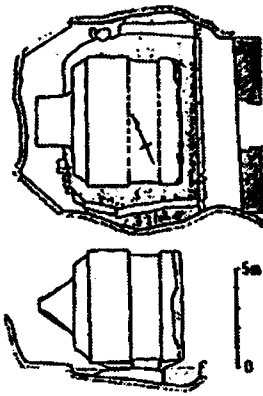
述は「作石」で、神様ではありませぬ。古社のバイブルである「延喜式」神名帳にも該当社がなく、少なくとも平安時代初期までは神社ではなかったのではないかと、という事です。ところが、一一八一年(養和元)

の「播磨国内神明帳」には「生石子神」社の名があり、延喜から二五〇年の間に創祀されているようです。さらに、播磨国の有名な中世文献「峯相記」では、陰陽二神から生石子神、高御倉神と続き、現在の祭神へと到っています。土着神から有名な神様へと神格を高めているようです。

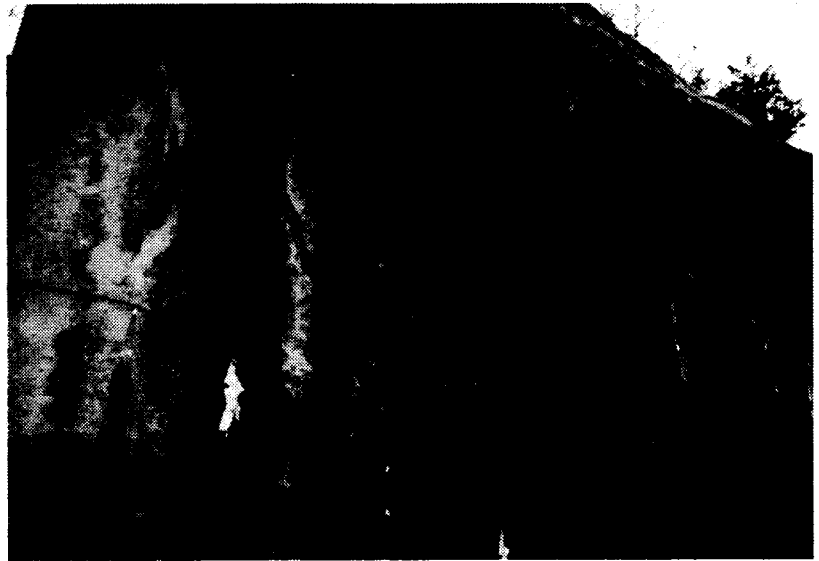
正月もまだ九日ですから、氏子の方々が社務所に詰めておられました。私たちが石の宝殿に一直線に向かい、参拝もそこそこに由緒ある経歴も蹴散らして「作石」の観察を始めました。氏子社中の心中はいかばかりか。

重量五〇〇トン、一辺六メートル以上もある立方体の一面には、屋根形を思わせる突出部分があります。奇妙なことに屋根形は拝殿側の反対にあり、ちようど家を真横に倒した形になっています。





石宝殿実測図  
(西谷真治氏による)



石の宝殿を下から見上げるが、大きすぎて  
全体の撮影ができなかった。

「播磨国風土記」には「この石は聖徳の王の御代に弓削大連（物部守屋）が造った石だ」と書かれています。しかし、聖徳太子が摂政となつたのは物部守屋が滅ぼされた六年後（五九三年）です。「播磨風土記」の編纂された当時は、守屋滅亡の時期から百年以上経過しており、時代的にやや混乱がみられます。

倉敷考古館の間壁夫妻の見解では、大和での竜山石による家形石館は、六世紀末から七世紀前半に主に見られ、権威を象徴する墳墓や棺の形や材質はただ個人の好みだけで左右したものではありません。その上で、石の宝殿は終末期古墳、とくに横口式石槨として造られた可能性が高い、ということ。そして、物部氏滅亡後、大王家と蘇我氏勢力の張り合う時期との関連で、「作石」を造る必要があったのではないかと発表されています。

私の感想としては、屋根形の部分が全体より小さいのでこの部分は縄を掛けるのに都合がよく、石槨として掘り抜こうとしていたのではなからうかと想像しながら見学しました。石の宝殿は「百聞は一見にしかず」でしたが、一度見てしまったばかりに謎は深まる一方でした。

新幹線に乗車していると車窓から

立派な明石城の石垣が見えますが、今日は各駅停車の旅、いつもは通過する街を訪ねることができました。

一六一八年（元和四）將軍秀忠は家康の曾孫小笠原忠貞に築城を命じました。幕府と姫路藩本多忠政の支援を受け、西国外様大名から京・大坂を守る要として築城されました。人丸山（赤松山）の標高三〇メートルの台地を利用し、西から東へ本丸・二の丸・三の丸が一直線上に並びます。本丸の四隅には三層の櫓を

建て、現在は巽櫓、坤櫓が残存しています。元和堰武ころの築城の特色として天守閣こそ建てられませんでした。したが、自然地形を生かした設計で、広い曲輪、堀、石垣など天守閣がなくとも威風堂々としていました。築城と平行して町づくりが進められ、町割りは姫路藩の客分であった宮本武蔵によるものと伝えられています。作家吉川英治氏の「剣の求道者武蔵」のイメージでいきましたが、「五輪の書」を残した剣の達人は町の設計まで行っていました。いったい武蔵とは何者だったのでしょうか。

最初の養子・造酒之助が本多忠刻の小姓に上がり、二人目の養子・伊織は小笠原忠実の御側勤めをし、後には家老にまでなります。これはすべて衆道（男色）の関係と分かっ

驚いていたら「当時は武士の嗜み」と先輩から教わり、武士の世界も奥が深い(?)と感じ入りました。

明石城の東の山の手から遊歩道となっており、明石海峡の波や淡路島を眺めながら、明石のシンボル東経一三五度、日本標準時の時計塔の北側に立派な山門がある人丸神社(柿本神社)に着きました。祭神はもちろん柿本人麻呂。古来より「歌聖人麻呂」を祀る神社は数多くありますが、その中でもこの神社は最も有名です。一七三三年(享保八)、人麻呂一千年祭にあたり、人麻呂生誕地の石見国とこの播磨国の柿本神社(人丸社)に「正一位柿本大明神」の神階神号を与えられています。

境内には、明石大門(海峡)を東西に往還する人麻呂の船旅の歌碑があります。また芭蕉も一六八八年(元禄元)人丸社に参り、

「蛸壺や はかなき夢を 夏の月」と詠んでいます。

高台にある神社からは明石海峡が目の前に見えます。古来から船の往来が頻繁で、摂津と播磨の境にある明石海峡は、旅の始まりであると同時に到着駅でもあると改めて感じさせてくれました。

探訪のスタートをきった新春の小さな旅の企画に感謝します。

### 福山開祖水野勝成公

#### 三五〇回忌大法要催行

福山開祖水野勝成公は元和五年(一六一九)備後福山藩一〇万石の藩主に封じられて以来、領民を第一とする善政を行いました。城を築き、城下町を造営してこの地を福山と命名。福山藩および周辺の海域を干拓して新開を築き、城下には上水道を敷設、さらに文化の昂揚を図るなど福山の基礎を造りました。名君として慕われましたが、慶安四年(一六五二)旧暦三月一日、八八歳で大往生、賢忠寺内の墓地に葬られました。

水野勝成公三五〇回忌に当たる今年、菩提寺である賢忠寺(境内は県史跡に指定)では、五〇年に一度の大遠忌法要を厳修されます。このたび賢忠寺住職水野覺巖師から備陽史探訪の会にご案内があり、趣旨をご理解のうえ多くの会員の皆様にご参詣いただきたい、とのことでした。

賢忠寺には日頃からお世話になっておりますし、五〇年に一度の大法要ということでもありますので、会として三〇人は参詣するようにしたいと考えています。下記要項をご覧ください。希望者は至急事務局までご連絡下さい。

### 【実施要項】

〔日時〕平成二二年四月十五日(土) 午前一〇時(受付九時)

〔場所〕賢忠寺本堂

(福山市寺町四一―二四)

TEL〇八四九―二五―二二三三

〔当日の予定〕

①水野勝成公三五〇回忌大法要

②参拝者先祖

③供養稚児行列

④墓参

★⑤昼食(お弁当・水野勝成公所縁の記念品付き)

⑥抹茶接待(賢忠寺境内にて)

⑦水野勝成公遺品展(本堂西側遺品展示室にて)

★⑧の昼食を希望する方は事前に申し込む必要があります。この申し込みは会場でまとめて行いますので事務局に至急電話で連絡して下さい。

参考までに、記念品込みの昼食代として五千円程度包むのが目安です。

①②③④および⑥⑦については参加自由です。ただし、法要にふさわしい服装でご参詣下さい。なお、賢忠寺には広い駐車場がありませんので、クルマでの参詣はご遠慮下さい。

〔水野勝成公遺品展〕

・絹本着色水野勝成公画像(県重文)

・絹本着色水野勝成公得度画像

・水野勝成公甲冑

革包茶系威二枚胴具足

関ヶ原の戦時着用(県重文)

水野勝成公甲冑

切付小札紋柄威腰取二枚胴具足

島原の乱時着用

水野勝成公遺髪

水野勝成公へその緒

水野勝成公自筆和歌短冊

・能面「小尉」

・洞簫「不絶」

・オランダ製砂時計など多数

### 古墳講座Ⅶ

〔実施要項〕

〔座長〕山口哲晶さん(部会長)

〔開催日〕五月一三日(土)

〔時間〕午後七時〜午後九時

〔会場〕福山市中央公民館

\*希望者は山口さんに

(千七二一―〇九四二 福山市引野町二一―三一七)

手紙でお申し込みください。

歴史小説読書会

### 【実施要項】

〔座長〕種本実さん(部会長)

〔開催日〕六月三日(土)

〔時間〕午後二時〜午後四時

〔会場〕福山市中央公民館(予定)

〔六月の課題図書〕

「高杉晋作」

古川薫著

文春文庫 定価八〇〇円

# 事務局日誌

一月一六日(日) 城郭部会現地踏査。ハチガダン城。参加三名。  
 一月二三日(日) 無情の雨。「常城推定地を探る」は中止。協議の結果、今年二月一七日に順延することに決定。  
 二月一日(火) 役員会参加一〇名。  
 二月五日(土) 歴史小説読書会開催。テキストは「吉川元春」参加八名。終了後、読書会参加者と有志で会報九三号発送作業と「沼田庄小坂郷の中世を訪ねて」資料作成。参加一六名。  
 二月五日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅶ」参加八名。於三吉町「SEVENS」。  
 二月六日(日) 「沼田庄小坂郷の中世を訪ねて」雨天中止。行事が二回連続で中止になったのは初めて。  
 二月一二日(土) 午後二時「古事記」を読む」参加二五名。  
 二月一二日(土) 午後七時「ふるさと探訪」編集会議。参加一一名。於市民会館会議室。  
 二月一九日(土) 「備後古城記」を読む」。参加一四名。於福山市民会館。  
 二月二〇日(日) 「沼隈半島の古里、山南郷の歴史を探る」参加七七名。

講師田口会長。  
 二月二六日(土) 第二回郷土史講座「蛇円山からみた常城・茨城」。講師寺崎久徳さん。於ふくやま市民交流館。参加四〇名。  
 二月二六・二七日(土日) 一泊旅行下見。平田恵・坂本敏・三好。  
 三月四日(土) 行事案内発送作業。  
 三月四日(土) 午後七時。古墳講座Ⅶ。参加一一名。於三吉町「SEVENS」。  
 三月五日(日) バス例会「神楽尾山の野に遊ぶ」。参加四八名。  
 三月七日(火) 役員会参加一五名。  
 三月一八日(土) 午後二時「古事記」を読む」。参加二〇名。於ふくやま市民交流館。  
 三月一八日(土) 午後七時。「備後古城記」を読む」。参加一五名。  
 三月二〇日(月) 「沼田庄小坂郷の中世を訪ねて」。再々度リベンジ。今度は好天に恵まれ、参加四〇名。  
 三月二五日(土) 第三回郷土史講座「鎌倉時代末期前後の福山地方の宗教」。講師小林定市さん。参加は三六名。  
 三月二六日(日) 青春きつぷの旅「桜花爛漫、醍醐着天に咲き薫る」。講師は平田恵彦さん。参加三六名。  
 \*とくに断りがない場合は会場はすべて福山市中央公民館です。

## 市民図書館講演会開催

福山市市民図書館のボランティア文化講演会(平成九年から開始、今年度で三年目。福山市の政界・財界・文化界を代表する人々が無償で講師を務める)は三月四日の神谷名誉会長の掉尾を飾る講演によって終了しました。そして早くも平成一二年度の講師陣がこのほど決まり、わが備陽史探訪の会から、神谷名誉会長に続いて田口会長が選ばれました。今年度の講演会は「二二世紀を担う若きリーダーたち」と銘打って実施され、田口会長はその一番手として登場します。  
 演題は「郷土史入門」。郷土史を学ぶ上での基本的な心構え・姿勢から具体的な調査のやり方までわかりやすく解説。資料・文献の探し方、資料整理の方法、ノートの取り方、文献批判の方法、現地調査の方法などを具体的な事例を通して話して下さい。聞き逃さない内容です。  
**【実施要項】**  
**〈講師〉** 田口義之会長  
**〈演題〉** 郷土史入門  
**〈日時〉** 四月一五日(土) 午後二時～四時  
**〈場所〉** 福山市図書館集客室

### 〈受講料〉無料

\*賢忠寺の水野勝成公三五〇回忌法要と同じ日ですが、賢忠寺と福山市民図書館はすぐ近くですので、法要参加者は終了後に会長の講演会に駆けつけるようにしましょう。

### 郷土史研究書待望の発刊!

このほど福山市の郷土史家、堤勝義さんがライフワークである備後地方の宗教をテーマとした書籍を左記の通り上梓されました。

### 「中世瀬戸内の仏教諸宗派 — 広島県備後地方 —」

探求社刊 二二〇〇円(税込)

中世瀬戸内を主に、尾道と鞆の寺院を対象として、研究史を整理して記述。また、備後の寺院・神社として加茂町広瀬の高松寺、吉備津神社を取り上げてその研究成果を発表されています。

今後、会の行事で委託販売しますので、多くの会員の方にご購入下さるようお願いいたします。なお、購入予約は平田事務局長宅(〇八四九—二三—三七八一)に電話で申し込んで下さい。

# 二〇周年記念大和一泊旅行 わが手に国のまほろばを!

去る二月二六、二七日の両日、旅行委員三人で五月実施の一泊旅行の下見に行つて来ました。

今年には備陽史探訪の会創立二〇周年、一泊旅行もできるだけ会員の希望にお応えしようということで、昨年来、様々な機会にアンケートをとつてきましたが、その結果を基にコースを決めました。

アンケート結果では、行つてみたい都道府県では奈良県が圧倒的に多く、全体の約六割。また、奈良県内では、明日香村・橿原市地域が最も多く、次いで奈良市・大和郡山市地域でした。旅行委員で検討した結果、やはりアンケートを重視しようという結論になり、コースもそのように設定しました。

飛鳥周辺はすでに行つたことのある方も多くいらつしやると思いますが、まだ行つたことのない人にとっては、ぜひとも行つてみたい古代日本の「聖地」だと思えます。

昨年来、古代史の大発見が相次ぐ飛鳥、いろいろ考えましたが、やはり定番のコースにしました。  
奈良・大和郡山周辺では、奈良市

は行つたことのある方が多いようです。ですからこの地域ではあまり観光パスの行かないところ、備陽史探訪の会ならではのコースということ、大和郡山市の史跡を選びました。大和郡山は中世・戦国期の大和国の政治の中心地でした。奇しくも福山藩初代藩主水野勝成公が福山に転封になる前任地でもあります。

### 【初日の探訪コースとその説明】

▼筒井順慶墓所：筒井氏は代々興福寺宗徒の家柄で、父順昭は大和の大豪族だったが、順慶二歳の時病没。

その後松永久秀の侵略を受け没落したが、織田信長に属して勢力を回復した。信長の命により大和国を統治し、郡山城を築城した。墓所には「天文十二年（一五八四）」の銘をもつ五輪塔（国重文）と覆屋（国重文）の中に筒井順慶の位牌堂がある。

▼慈光院：大和郡山市小泉は江戸時代に小泉藩があつた。この地は中世に小泉氏が拠つた地だが、豊臣政権下では片桐且元の弟貞隆が領有して館を構えた。且元は豊臣秀頼の後見役だったが、家康の信任も厚く、大阪夏の陣後には大和国竜田四万石の大名となった。貞隆も一六四〇〇石の大名となつて大和国小泉を安堵された。貞隆の子が有名な石見守貞俊、すなわち片桐石州で、大名茶「石州

流」の創始者である。慈光院は石州が父の菩提を弔うために建てた寺で、書院と茶室が国重文に指定されている。枯山水の庭園（国史跡・名勝）は小ぶりだが、奈良盆地を借景にしている。この寺ではまず抹茶をいただき、そのあと拝観する。

▼大納言塚：「大納言」とはいうまでもなく秀吉の弟、偉大なる補佐役、小一郎秀長のことである。筒井順慶のあとの大和一国と和泉・紀伊一〇〇万石を支配したので「大和納言」と称された。没後、ここに葬られたが、江戸時代徳川政権下のため墓は荒廃したが、春岳院の栄隆らによつて安永六年（一七七七）に墓域が整備され、現在の五輪塔はその時建てられたものである。

▼郡山城：郡山城（県史跡）は筒井順慶が天正六年（一五七八）築城を始め、豊臣秀長・増田長盛らが拡張に努めた。城域は二五万㎡にも達し、二の丸には二つの県立高校がある。深い濠と高石垣に特徴があるが、積み方は古式（野面積み）である。江戸時代には水野勝成が最初に入部したが、その後、松平・本多と続き、享保九年（一七二四）に柳沢吉保の子吉里が一五万石で入り、明治維新まで続いた。城内中心部に柳沢神社・柳沢文庫もある。

▼神田環濠集落：中世に村落が自衛のために集落全体を環濠で囲うことがあつたのは堺の例がよく知られているが、遺構はほとんど残っていない。しかし、神田の集落はほぼ完全に残っている全国唯一の例である。神田はもちろぬ「古事記」を暗誦した、あの神田阿礼の本貫地である。

▼売太神社：式内社。祭神は神田阿礼。神田の集落の鎮守的存在である。現在は童話の神様として親しまれている。

▼額安寺：古くは額田寺あるいは額寺と呼ばれていた。南都七大寺のひとつ大安寺の前身、聖徳太子創建の熊凝寺跡とも考えられている。この周辺は古代の額田部一族の本貫地、寺のある場所は額田部寺町である。日本最古の虚空蔵菩薩半跏像（国重文）や木造文殊菩薩騎獅像（国重文）等の寺宝を拝観する。

▼額安寺五輪石塔群：八基からなる五輪塔群で、いずれも国重文。中に「永仁五年（一二九七）」の銘をもつものがあるので、まとめて「鎌倉墓」と呼ばれている。形がほとんど崩れておらず、大きく見事な五輪塔である。すぐ近くに額田寺窯跡（国史跡）があり、合わせて見学する。

\*時間が余れば、島の山古墳・比売久波神社・馬見丘陵古墳公園を探訪。

《二日目の探訪コース》

△新沢千塚古墳群（前期の大群集墳、宿舎の裏山、朝食前の散歩）

△越岩屋山古墳（石室へ入室可、斉明天皇陵の可能性が高い）

△高松塚古墳・壁面館（説明不要）

△飛鳥歴史公園館（国立のガイダンスセンター）

△欽明天皇陵（平田梅山古墳）

△吉備王墓と猿石（飛鳥の珍石）

△鬼の雪隠・鬼の俎（飛鳥の珍石のひとつだが、これは古墳の石材であることが分かっている）

△亀石（飛鳥の珍石。亀が西を向くと洪水がおおるとか）

△川原寺跡（川原寺は飛鳥三大寺の一つで、飛鳥川原宮跡でもある）

△甘樫の丘（昼食はここで。大和の国中を眺めるには最高の場所）

△飛鳥水落遺跡（天智帝の水時計跡）

△飛鳥座神社（土俗信仰の陰陽石で有名な飛鳥の氏神様）

△飛鳥寺（蘇我氏が建立した日本最古の寺院。飛鳥大仏で知られる）

△伝飛鳥板蓋宮跡（斉明「皇極」天皇の宮伝承地）

△酒船石（飛鳥の珍石のひとつ。直下で亀形石造物の大発見があった。もともとは一体のものか？）

△石舞台古墳（蘇我馬子の墓の可能性が高い。いまはNHK朝ドラ「あすか」のシンボルになっている）

△榎原考古学研究所附属博物館（問答無用、日本一の考古学専門の博物館。展示は感動の一言、これを見るだけでも参加する価値あり）

\*天候その他の都合でコースを変更する場合があります。

《講師》旅行委員三人が担当

平田恵彦さん（事務局局長）

坂本敏夫さん（評議員）

三好勝芳さん（事務局役員）

《実施日》五月二〇・二一日（土日）

\*雨天でも決行します。

《集合時刻》午前六時三十分

（時間を厳守して下さい）

《集合場所》福山駅北口バス停前

《参加費》会員限定 二四〇〇円

\*今回、一般参加は受け付けません。

慈光院拝観料「一〇〇〇円」・額

安寺宝物拝観料「三〇〇円」・高松

い。また、二日目の夕食（三木SA

でとる予定）は各自の負担です。

《宿舎》

「榎原市サイクリングターミナル

千輪荘」 千六三四―〇八二六

奈良県榎原市川西町八五五―二

Ⅷ〇七四四―二七―三一九六

\*宿舎は明日香に近接、宿舎自体が

国史跡（新沢千塚古墳群）に隣接す

るといふ絶好の場所に立地し、各部

屋・浴室・寝具も清潔できれいです。

ただ、青少年の育成を目的に設立

された施設なので、やや不慣れな面が

あります。無料洗面具はありません

ので各自で持参して下さい。浴室に

シャンプー・リンスがありませんの

で頭髪を洗う方は準備して下さい。

布団の上げ下ろしやシーツの着脱も

セルフサービスです。

なお、宴会の実施を前提とした施

設ではありませんが、夕食（宴会料

理ではありません）の際に簡素な酒

宴は催します。各自部屋に帰ってか

ら盛り上げられるように、その準備は

しておきます。

《募集人数》四七名（プラス一〇名

までは補助席でかまわなければ受

付。それ以後はキャンセル待ち）

《参加申し込み》

事務局に電話で。今回は電話申し

込みに限ります。郵送の申し込みは

受け付けません。また、会員本人以

外の申し込みは受け付けません（た

だし家族会員はOKです）。

《受付日と受付時間》

四月一三日（木）～四月一五（土）

午後（夜）七時～午後（夜）八時。

\*公正を期すために先着順とします。

また、指定日以前や指定時間以外の

申し込みは一切受け付けません。

《キャンセル》今回はキャンセル待

ちが多数出ると思われます。キャン

セルは早急にお申し出下さい。

《その他》二日目は、飛鳥という地

域の性格上、そのほとんどを歩いて

移動します。ですから、いくぶん健

脚の方向きのコースです。歩きやす

い服装・靴でご参加ください。

《帰着予定時刻》午後一〇時ころ。

第五回郷土史講座

謎の遺跡

講座内容については次回行事案内

に掲載します。お楽しみに。

《実施要項》

《講師》篠原芳秀さん（評議員）

《開催日》五月二七日（土）

《時間》午後二時～午後四時

《会場》ふくやま市民交流館

《会費》資料代として一〇〇円程度

《参加申し込み》

事務局に電話で。今回は電話申し

込みに限ります。郵送の申し込みは

受け付けません。また、会員本人以

外の申し込みは受け付けません（た

だし家族会員はOKです）。

《受付日と受付時間》

四月一三日（木）～四月一五（土）

午後（夜）七時～午後（夜）八時。

\*公正を期すために先着順とします。

また、指定日以前や指定時間以外の

申し込みは一切受け付けません。

《キャンセル》今回はキャンセル待

ちが多数出ると思われます。キャン

セルは早急にお申し出下さい。

《その他》二日目は、飛鳥という地

域の性格上、そのほとんどを歩いて

移動します。ですから、いくぶん健

脚の方向きのコースです。歩きやす

い服装・靴でご参加ください。

《帰着予定時刻》午後一〇時ころ。

